



双葉ダルマを囲み、町の復興や観光交流人口の拡大に向けた思いを共有した伊沢町長⑤と渡辺社長



▲11月18日 福島民友新聞掲載

中野地区復興産業拠点 企業立地協定 総結式  
町と同社が17日、町内の  
中野地区復興産業拠点への  
立地協定を結んだ。施設名  
は「だるまランド双葉(仮  
称)」で、双葉ダルマの製  
造・販売を行うほか、下地  
作りや成形、絵付けまで全  
ての工程を公開、見学・体  
験できるようにする。総本  
舗は同市でだるまランドを  
運営しているが、同社によ  
ると、だるまの製造全工程  
を見学・体験できる施設は  
全国で初めてだという。

施設近隣には東日本大震  
災・原子力災害伝承館や、  
県復興祈念公園などが立  
地。インバウンド(訪日客)  
需要などを含めて、開所初  
年度は約2万人の来場者を  
目指す。また、10人程度の  
雇用を予定している。

双葉町への立地の背景に  
は、だるまが結んだ縁があ  
った。町ダルマ市は江戸時  
代からの歴史がある一方  
で、町独自のデザインのだ  
るまはなかったという。そ  
こで約30年前に町おこしを

は、だるまが結んだ縁があ  
った。町ダルマ市は江戸時  
代からの歴史がある一方  
で、町独自のデザインのだ  
るまはなかったという。そ  
こで約30年前に町おこしを

本舗13代目の渡辺守栄さん  
に相談。渡辺さんが太平洋  
をイメージした水色の縁な  
どが特徴の「ふたば福ダル  
マ」を作製した。

以来、町の縁起物として  
双葉ダルマが誕生。総本舗  
が製造を行い、ダルマ市に  
出店するJA福島さくら女  
性部協議会双葉支部ダルマ  
部会などに納品してきた。  
町が原発事故からの復興を  
目指す中で、七転び八起き  
の縁起物を通してぎわい  
づくりに貢献しようと施設  
の立地を決めた。

町役場で締結式が行われ  
伊沢史朗町長と、総本舗14  
代目でだるまランドの渡辺  
高章社長が協定書を交わし  
た。伊沢町長は「双葉ダル  
マは復興のシンボル。観光  
交流の新スポットとして交  
流人口の拡大に期待した  
い」、渡辺社長は「だるま  
の持つ挑戦心などの意味合  
いは双葉町と重なる。縁を  
大事にして復興に貢献して  
いきたい」と話した。

## 製造全工程の見学、体験

江戸時代から続く新春の恒例行事「双葉町ダルマ市」で知られる  
同町にだるまの製造販売、観光体験が一体となった施設が整備され  
る。町の縁起物「双葉ダルマ」の製造を手がける白河だるま総本舗  
(白河市)が設立した新会社「だるまランド」が運営、2028年  
春の開所を目指す。

# 双葉にだるまランド

「だるまランド双葉(仮称)」は、どのようなことができる施設になりますか？

今の「ふたば福ダルマ」は、どのような縁があり、どのようなデザインがなされましたか？

ダルマの顔には、どのようなことを願い、どのような絵柄が描かれているか、調べてみましょう。